

2014年9月24日
第22号

自然と文化だより

発行:NPOシニア自然大学校
自然と文化科

*****目次*****

- P1 今号の TOPICS 谷川稔
P2 新専任幹事 飯田正恒
P3 仲間たちの近況報告 (1)
1班 吉川文子
2班 上池喜代美
P4 仲間たちの近況報告 (2)
3班 古荘光子
4班 御旅屋瑛一
P5 仲間たちの近況報告 (3)
5班 日坂雄二郎
6班 木村忠司
P5 リレー随筆 堂瀬広幸
P6 私の玉手箱 堂下登美子
P7 自由題サロン 大村沙紀
P7 俳句・川柳・絵画サロン
水彩画 岩城正大
漢詩 宮阪信次

◇自然と文化だより◇

22号に投稿頂いた皆様、有難うございました。

すっかり秋めいた気候を野外に満喫する事が大好きな自然と文化科の我々、秋の夜長をこの時期、読書に親しむ季節ともいえます。このお便りも 22 号を数え多くの方々に執筆頂きました。仲間のつぶやきを、作品を、秋の夜長、楽しんでください。

N.Take



企画の逸話と「多人数参加に対応する課題について」

企画委員 谷川 稔

自然と文化科入会以来企画委員として在籍し、幹事 1 年、専任幹事 2 年間を経験しました。先輩の多くは企画委員として活躍され、企画は当科の原点だと云われています。当科の発足当時は企画が中心で活動内容を決めていたそうです。現在の委員会も企画より分化し、忘年会、新年会は 2 年前に企画から総務に移行して頂きました。

現在 100 名余の大所帯となり、各行事には多くの配慮が欠かせません。交通機関、集合場所、コースの選定、多人数参加者の移動経路、地域社会への配慮、参加者のマナーの向上など。企画委員会の企画は、文化を取入れた内容となり、同一場所の同一企画は、科員に受け入れられず、各回、場所、中身の違いが要求されます。新入会員の皆さんは、過去に企画した場所は知らず、行きたい所はいっぱい有りますが、ベテランは知り尽くしているわけです。バス旅行も多くの会員より希望があり、弁当の要望を取り入れ数回用意しましたが、好みの違いも避けられず止めています。

困難なのが 1 泊旅行の場所の選定と、宿泊施設の受け入れ態勢です。時代と共に団体旅行から個人旅行へと変化し、参加意識の変化と共に宿泊施設も個人中心になり、限られてきます。

現在の規定では遠方への下見はまず困難です。必要な情報は、科員が収拾、現地の観光協会、ネット検索、パンフレットなどに依ります。ホテルの宴会場所、料理内容、二次会の手配、バス行程や休憩場所、現地案内人との交渉事などを決めます。「現地を直に見ず、すべてに精通」し、事故の無い旅行（危険箇所、足の自信のない人の配慮）が当たり前ですが、現場の確認は出来ないの、詳しく聞くしかありません。また、旅行会社と違い軽く見られる傾向にあり、案内人の案内場所が親しい土産物店であったりします。

企画決定では、参加者数が意向調査時と実施時で激減する問題も、下見費用と補助金の問題もありました。「自然」と「文化」は両輪であり、科員の皆さんの積極的な支援があってこそ成り立ちます。宿泊地の確保は 3 か月前、正式申込み 1 か月前です。

今後の場所の決定は、候補地の一般投票などで決定し、科員全員が何らかの役割をもって参加する。あるいは、バス 1 台の定員制にした企画とするなど、全員参加を前提にした企画は、不可能な時期が来ることでしょう。近年は旅行会社の自然観察ツアーが多く企画されており、旅行会社の企画で行くのも一考でしょう。また懇親会は、一泊旅行ではなく、近隣の施設でやるなども可能です。

多数の参加を従来方式の企画委員会でごなすのは、困難になっていると言わざるを得ません。今年は、自然と文化科の発展方向を積極的に討議する時期と考えます。

新米社会貢献専任幹事が思うこと

飯田 正恒

社会貢献委員会での活動経験がほとんどない私に専任幹事が務まるのか自分でも疑問に思い、しかしのんきな性分なのでなんとかなるだろう、エイ・ヤ！と引き受け、はやくも6ヶ月が経過しました。その間4回のシニア自然観察会を実施しましたが、前任者や経験豊かな幹事と委員さん、観察リーダーを担当していただいた多くの皆様に助けられ、無事に進めてこられたことを心から感謝しています。



定年退職後、地域のボランティアガイドグループや、企業がOBのために組織した団体で、歴史散策、ハイキング、講演会、コンサートなどを楽しんできました。あるときお客様から「自然観察会」のリクエストがありましたが、知識が全くなく、あちこち調べて当校の存在を知り、講師を派遣していただいて自然観察会を定期的に関くようになり、シニア自然大学校との関わりが始まりました。

観察会当日、講師の説明に参加者とともに聞いても基礎知識がないのでチンプンカンプン。そんな状況が3年間ほど続き、遅まきながらこれではイカン、何とか分かるようになろうと一念発起して平成23年に本校に入校、以来悪戦苦闘しながら、自然と文化科で4年目を迎えたところです。学んだことを確実に自分のモノにするには他人に教えてみるのが一番と、いろいろな機会を捉えて講師実習を重ねてきましたが、学ぶべきことは無限にあることを今更ながら実感する毎日です。これからも自然の世界を知り、そして理解することを楽しく続けたいと思っています。

そんな私が社会貢献委員会の専任幹事を担当することになりましたが、今年は社会貢献委員会メンバー20名の内、新米の私一人を除き全員ベテラン揃いという、恵まれた（一方、こわい？）環境です。先輩方に甘えながら教えとご協力をお願いし、責任を果たしていこうと思っています。

苦労というほどのことではありませんが、自然観察会実施日にお客さまへお渡しする「ガイド資料」、「観察Map」とリーダー用の「ガイドの手引き」

をごく短期間に完成させなければならず、パソコン相手に格闘する日々が数日続きます。限られた紙面で当日案内する植物について、専門的にならず、お客様の好奇心をかき立てる説明文を考えて写真をつけ加え、美的感覚をも満足させうるビジュアルな資料をめざすのですが、文字や写真が位置ずれしたり行方不明になったり、誤字、脱字、意味不明の文章であったり、写真もいまいち文章との釣り合いに欠けるなど、見直すたびに修正・手直し箇所が見つかり、悪戦苦闘しながらのスタートでした。4回目にもなると要領、コツが飲み込めてきて、ずいぶん作成スピードも上がり、楽に作成できるようになりました。この資料作成の手順やコツをきるだけ分かり易くマニュアル化しておきたいと思っています。

観察 Map 作成例



今期の課題が2つあります。

- ① 新規社会貢献活動への参画を模索。
 - ② 自然観察会の2週間前に行う予備下見の交通費支給を来年度予算で認めていただく。
- この2件を社貢委で十分に検討し、提案の予定です。皆様のご理解とご支援をお願いします。

不思議に触れる

1 班 吉川 文子

植物の不思議さに加え、今年から念願だった鉱物を学ぼうと鉱物クラブに入りました。金やダイヤモンドを探したいからではありません(でも化石や水晶には興味がありますが)。この3ヶ月いろいろな鉱物があることや、地球の始まりからプレートや地質の話など、へえ〜と驚くことがいっぱいあり、鉱物学の奥の深さを知らされています。

鉱物に興味を持ったのは中学時代の理科の授業で、家から持ってきた鉱物を見せ合ったときに自分は金だと思っていた石(キンキラキンに光っていた)が、黄鉄鉱という石で、金は光っていないということを初めて知った時でした。友達の中に水晶を持ってきた人がいてその美しさに驚き、自分も探してみたいと思いました。また、本科の講座で地球の軸(N・S)が逆になったことが何回もあり、それが岩石から分かったと聞き、それを見てみたい!と思いました。

鉱物のみならず、植物の分布や動物の化石なども大陸の移動と大きく関係していて、地球規模的な見方が大切なことも学んだり、パソコンで地質図の開き方も勉強したりしています。

まだまだ何も分からず、珍しさに右往左往の状態です。初めての巡検では、鉱山のズリ跡からきれいな石英の中にモリブデンを見つけたり、礫岩の中に日本がまだ大陸の縁にあった時代の砂漠のような場所でできたまん丸な砂岩をとったり、山の中に入り黙々とハンマーで石を割りサファイアやルビー(鉱物的には一緒のものだそうです)を見つけて大喜びをしているところです。次には化石探しを楽しみたいと思っていますが、和泉層群のアンモナイトにはちょっと変わった形のものがあるそうで、いつか出会えたらいいなと思っています。今、家の中はどんぐりに加えて石だらけになってきました。

好奇心に突き動かされて、知りたい!と始めていますが、植物も鉱物も学ぶところまではいかず、不思議に触れているという感じです。



スイス・ハイキング紀行

2 班 上池 喜代美

6月下旬高等科の仲間とスイスへ行った。午後関空を出発、ドイツを経由してスイスバーゼル空港へ到着したのは現地時間21時、まだ明るい。ホテルに到着した頃ようやく薄暗くなった。翌朝、バーゼル駅で荷物を預け列車でスイスの首都ベルンへ。旧市街地を観光し、午後列車を乗り継いでハイキングの拠点ヴェンゲンへ向かった。標高1,274mにあるホテルから明日から歩く山々が見えた。三日目は快晴、電車、ロープウェイ、ケーブルを乗り継いで標高1,907mのアルメンフーベルへ。アイガー、メンヒ、ユングフラフの山々がすぐそこに見える。記念撮影していいよ待ちに待ったマウンテンビューハイキング開始。お昼は、日本から持参したレトルトのお粥と梅干、スイスのCOOPで買った果物。ハイキングの昼食は毎日このスタイルとなった。シラタマソウ、オキナグサ、アルペンローザ、色とりどりの花を観ながら歩く。四日目は、電車を乗り継いで標高3,453mのユングフラウヨッホ、スフィンクス展望台へ。あいにくの天気で眺望はなかったが氷河を身近に見て満足。標高2,320mまで登山電車で下山、小雨の中を歩き続け、ホテルに到着したのは18時前。さすがに疲れた1日となった。五日目、バスでフルカ峠を越えツェルマットへ。途中標高2,300mのローヌ氷河洞窟を見学した。氷の洞窟の先端に白いシートがかけられていた。温暖化で氷が溶けているらしい。午後、氷河特急という名のゆっくり走る展望列車でツェルマットへ向かう。車窓の風景は雪を頂く山々のみ、氷河の中を走ることはなかった。六日目、朝焼けの真っ赤なマッターホルンを眺めてコルナグラード展望台へ。標高3,089mから傾斜のきつい坂道をホテルまで



ハイキング。花は牧草らしく、途中で大きなカウベルをぶら下げた牛達に出会った。中腹のチーズ小屋でお土産にチーズを買った。七日目、マ

ッターホルントレイルをハイキング。時折小雨は降ったが、足下の花が励ましてくれる。標高差952mを5時間かけて歩ききった。八日目は快晴。スイス最終日は列車とポストバスを乗り継いでサースフェーへ。小さな田舎町で最後の山々を満喫した。

フジとナンジャモンジャ

3班 古荘 光子

ナンジャモンジャは「見慣れない、名前がはっきりわからない大きな木」を呼んだらしく、カツラ・クスノキ・タブノキ・カゴノキ・クロガネモチ・ホルトノキと各地にある。

奈良、猿沢の池を春日大社に向かう途中の「菩提院大御堂」に三作の塚がある。三作少年が習字の稽古中、犬と誤って投げた文鎮で鹿を殺してしまい、「石子詰め」の刑に処せられる。悲しんだ母が「来世には長生きできるように」と作った亀の形の塚がある。この庭にナンジャモンジャがある。ここにあるのはモクセイ科のヒトツバタゴ。

5月に奈良の飛火野の「フジ」を本科同窓会で案内することとなった。飛火野のお勧めはフジが絡まり文字どおり「藤の木」。戦争の食糧難の頃、僧侶が畑にした跡の残る所にその木はある。

今年は4月中旬から大阪市内の公園でフジが咲き出した。嫌な予感。案の定、5月連休明けフジの花はすっかり散っていた。(今年は裏年でもあったが)その代わり、ナンジャモンジャは満開。「白い紙を切ったような」の表現通り本当に美しい花であった。

そんなヒトツバタゴが3000本も自生する対馬に行くことができた。対馬鰐浦の集落をとりまく山々に白い花が咲き乱れ、海に照り映えるところから「海照らし」と呼び、その花卉の珍しさから「ナンジャモンジャ」と言い、この木が枯れると鉈の刃も立たないほど硬いことから「ナタオラシ」とも呼ばれる。

奈良の1本のナンジャモンジャが山一面咲き乱れる様はいかならん！！と楽しみに出かけた。途中道路の並木にナンジャモンジャを見ながら(山一面の花盛りを想像する。)そして、いよいよ鰐浦へ。(うそ!)斜面には花がちらほら。今年は花が早く咲き、4月末の大雨風で散ってしまったとのこと。残念無念。

フジとヒトツバタゴに期待外れの年であったが、人間のスケジュールに頓着しないのが「自然」。花期が外れて違う花に出会うことがある。それが又、楽しいことでもある。

花盛りの対馬に行きたいという夢も増えた。ヒトツバタゴの雄蕊雌蕊が良く分からなかったが、調べてみて雌雄異株であるが雄株・両性花異株ということを知る。今度よく確かめよう！！

89歳まで現役で活動しよう！

4班 御旅屋 瑛一

春から夏にかけて89歳の高齢の演奏者の演奏に接する機会がありました。以前にも一度、「にわか文楽愛好家」という題で書きましたが、4月の文楽公演で通し狂言「菅原伝授手習鑑」に出演した太夫の竹本住太夫さん、6月の大阪フィルハーモニー定期演奏会にピアノ独奏者として出演したアルド・チッコリーニさんです。いずれも年齢は89歳です。それぞれの道で第一人者の現役です。まさに生涯現役を実践している方です。

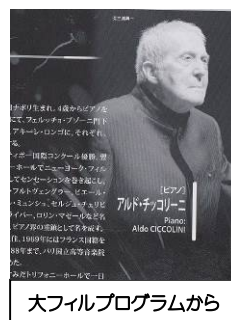
4月に通し狂言「菅原伝授手習鑑」の公演があり、にわか文楽愛好家は早速、出かけました。全約9時間の公演です。この公演は人間国宝・竹本住太夫



さんの引退公演でした。私たちが聞くと、非常に感情豊かで引退は惜しいと思いました。

本人は一昨年夏に脳梗塞にかかり、その後復帰をしたものの、元には戻れないと満足せず、引退となったようです。声の迫力はなくなったものの、その反面、渋い声は他の太夫の追隨を許さないものでありました。ここまで頑張り、自分の芸に満足できなければ潔く引退する姿に感じました。

6月にはピアニストのアルド・チッコリーニの演奏を聴く機会がありました。名前は知っていましたが、フランスの作品が得意な過去の人と



思っていました。プログラムの解説によると年齢は89歳と。舞台に出る時には指揮者の肩を借りていました。「これで弾けるのかなー」と一瞬思いましたが、曲が始まると、その明快

なタッチで不安をふっとばしました。若いころの演奏ほど力強さはないものの(注:55年前の録音CD)、洗練された響きには透明感があり、じっくりとした味わいを醸し出していました。

両人とも年齢に負けず、元気で活動する姿に感心するとともに加齢や病による衰えを日ごろの練習により、多くの観衆に感動を与える力を保っていました。我々も見習わなくてはと強く感じました。お互いに89歳まで元気に活動を続けられるように努めましょう！

「自然と文化科」に入科して

5 班 日坂 雄二郎

「自然と文化科」へ入科し、早 5 ヶ月が経つ。慣れ親しみ始めた時期であるが、思い出すままに入科して驚いたことを挙げたい。

・4 月 4 日に新入科員オリエンテーションが行われたが、2 月末に歓迎メールを、3 月頭には 4 月の活動計画を、そして 3 月末には、膨大な量の資料がメール送信され、先ず吃驚した。

しかしながら、科員人数の多さ、活動計画の緻密さから考えて早め、早めの情報伝達が必要であり、代表始め総務の方々、各委員会専任幹事の皆様方の用意周到さであることを最近感じた。

・植物について、詳しい方が大勢居られることは、入科前から耳にしていたが、関連する昆虫、鳥類、動物以外にも、歴史、古代史、美術、・・・といったジャンルにも詳しい方が居られ、学者の様にそれらを研究されていることに吃驚した。

しかしながら、このことが各講演会において普段聞けない、お会い出来ない講師の方々の講演に繋がり、歴史散策、文化散策といった企画委担当の斬新なメニューに現れることとなるので、非常に有難いと感じている。「自然と文化科」へ入科して良かったと考えている点であり、今後更に楽しみである。

・まだまだあるが、紙面の関係で最後にもう一つ、今夏の異常気象、特に局地的な集中豪雨が頻発し、何時雨が降ってもおかしくない状況でも、不思議と「自然と文化科」の活動日は、降らないのには吃驚。8 月 29 日の滋賀県、水生植物園・佐川美術館のバスツアーにおいても雨予報だったが、運よく帰りの名神でパラパラとした程度。更に遡って、8 月 8 日の伊吹山自然観察会では、雨を覚悟で、駐車場でかっぱを羽織り、観察後駐車場で昼食をとのことで、身軽な恰好で急ぎ観察したが、結局雨は降らず、伊吹山を離れる頃から降り出した。この科には、秘密の力が潜んでいるのだろうか？今少し、この部分を観察したい。



写真挿入 広報



伊吹山キンバイソウと琵琶湖の水生植物園

至仏山と燧ヶ岳へ

6 班 木村 忠司

至仏山と燧ヶ岳の名を知ったのは、深田久弥の「日本百名山」を読んだ時である。「広大な尾瀬ヶ原を差し挟んで東西に対立している燧ヶ岳と至仏山」登頂の長年の夢を果たそうと、この 7 月に 3 泊 4 日で尾瀬のメインコースを歩いてきた。

1 日目、蛇紋岩という特異な植生を育む岩石でできている至仏山をめざす。前夜の雨で滑りやすくなった岩の上を歩き、高度を上げていくと、お花畑に。花の宝庫と呼ばれているだけあって、高山植物が豊富だ。水が滴るホソバヒメウスユキソウの姿が、とても瑞々しく、つややかだった。

鳩待峠から山の鼻を経て尾瀬ヶ原に出ると、最盛



期のニッコウキスゲや風に靡く姿が涼しげなワタスゲの群生、もう見られないと思っていたミズバショウが迎えてくれた。行く手には「颯爽

として威厳のある」燧ヶ岳。振り返ると「悠揚とした軟らかみのある」至仏山。尾瀬を引き立てる二峰が、夏の空をバックに美しい姿を見せていた。天気も良く、最高の気分。「夏の思い出」「この広い野原いっぱい」を口ずさみながら歩いた。

2 日目、見晴から沼尻まで歩き、ナデッ窪を登る。雪崩窪が訛ってナデッ窪となったという急登は、前夜の雨で沢のようになっていた。滑りやすい蛇紋岩と違い、安山岩はまだ登りやすかった。振り返ると、湖面輝く尾瀬沼が大きく見えた。

高度を稼ぎながら登っていくと、長英新道との分岐に。そこで昼食を摂り、力を蓄えて登頂をめざそうとした頃、あいにく雨が降り出した。御池岳の山腹を絡むように進み、燧ヶ岳へ。頂上に着くと雨と風で視界が悪く、尾瀬沼は見えなかったが、長年の夢を果たすことができ、満足だった。

3 日目、尾瀬沼ヒュッテから見上げる燧ヶ岳は、朝もやの中に堂々と佇んでいた。



大峯山—山上ヶ岳へ—

堂瀬 広幸

今年も大峯山へ出かけた。もう何年になるか、この山に登る事が習慣のようになっていく。

8月12日未明から雨で山に登る条件からは程遠い状況で大いに迷った。

大峯山—山上ヶ岳—“従是女人結界門”と彫られた石碑が入口に立ちはだかるように建っている。



「懺悔懺悔、六根清浄」を唱えるように、叫ぶように修験者達が錫杖を打ち、法螺貝を吹

き登るのである。数十年飽きもせず登っている友人に誘われて私も何年になるか登っている。

1300年以前修験道の役行者が開いたと云われ修行の根本道場の御山である故に、大峯山は古来から伝統的修験道の聖地である。ご本尊は蔵王権現、不動明王、役行者神變大菩薩の三尊で、5月3日に戸開け、9月23日を以って戸閉め、以降雪に閉ざされるそうである。

朝、雨の中で友人は言う、修行道場へ行くのだから雨であろうが、嵐であろうが登る意味はある。言われてみればその通りで登ることにした。雨は相変わらず登山口まで追って来た。駐車場の兄さんが今の処登るのはあんたら二人だけよ！無・・・般若心経～友人が唱え聖地に入る。山が匂う、雨の所為か、参道は寂然としている。スギ、ヒノキの中をひたすら雨に打たれて登る。すれ違う修行者がいれば“ようお参り”と言い合いをするがそれも無く、唯々大峯山寺へ～身口意三業を整え参入召されよ～門前着、その頃から雨上がり陽が差す様は浄土の入り口かと・・・大峯山寺からはなんと雲海を見る！天上の寺に居るような不思議な体験を、友人はもうひたすら踊り上がらんばかりの感激で握手をする。
[観察＝スギ、ヒノキ、ヒメシャラ、トウヒ、ブナ、ヤシャブシ、リョウブ、オオイタヤメイゲツ等、また、機会あれば草本含め紹介を・・・]

8月12日正午大峯山寺に合掌。
まもなく69回目の終戦記念日を迎えるー了

「また来てね」

堂下 登美子

3月から高等科12期の仲間5人とマジックサークルに入った。そのサークルは、ある病院のデイケアセンターで2か月に1度マジックショーのボランティアもしている。観客はご老人30人位と数人の介護士さんたち。5年位の実績があるそうだ。

マジックショーの経験がある私は4月から早速、演者となった。5人の先輩と私とで演じる時間は1時間。1人10分間。私は演目を4つ準備したが5分もかからない。経験があるとはいえ人前で演じた回数は少なく、ましてやデイケアセンターでは初めて。どうしたものか。アイディアも浮かばないまま当日を迎えた。

先輩方の演目は3つまで。どんなに時間のかかるマジックかと思っていたら、長いものもあるにはあったが、ほとんどは長くなかった。では、どうされていたのか。場をほぐし、場をなごませ、場を盛り上げるため、マジックの前、合間、または、演技中に観客に話しかけておられた。なるほど。けれども、私はその場でのアドリブも思い浮かばず、出入り入れて5分位で終えてしまった。

驚きの光景を目にしたのは閉会のあいさつ後。1人の女性演者にご老人数人が「また来てね。」と言いながら手を握っていたのだ。その先輩の演技は素晴らしかった。長い浪曲マジックだった。浪曲はご老人たちの琴線に触れたようだ。

6月の2回目はスタートを工夫した。『七夕』の歌をまず歌っていただいた。続いて、七夕に関わるマジックをした。予想以上に皆さんしっかり歌ってくださった。気分もほぐれたようで、マジックにとっても集中してくださった。手応えを感じた。出入り入れてほぼ10分間だった。

8月の3回目。「イチゴジュースがいい人。」「レモンジュースがいい人。」それぞれ手を挙げていただく。皆さんを巻き込みながらのマジックをした。会場は弾んだ雰囲気となった。演じ終えて戻ろうとすると2人のご老人に呼び止められた。「良かったよ。」と言っていただけだ。

マジックショーを見て、不思議だったなあ、おもしろかったなあ、また来てほしいなあと思っていただけのように、これからはご老人たちに合ったマジックを選び、マジックの技量を高め、話術を鍛えていきたい。

『思い出のマーニー』

大村 沙紀

小学6年生の孫娘に買った本の名前です。読書が大好きなこの子はすでに100冊以上の本を読んでいます。とりわけこの本は面白かったとみえて、私の目に付くところに置いてありました。

上巻を読み始めた途端引きずり込まれるようにして『思い出のマーニー』の世界とこの子の思いの中に浸り時の経つのを忘れました。一気に読むのが惜しく、しおりを挟みました。主人公のアンナの気持ちとこれを読んだこの子の気持ちを重ね合わせてこれから先の筋を思い浮かべました。

不思議な話です。

夏休みを一人で過ごすために一人でロンドンからリトル・オーバートンに来て海辺の入江近くにあるシメッチ屋敷の見える、おばさん、おじさんの家で過ごす一人ぼっちの女の子の体験記、空想の世界の広がりを描いたものです。もう一人、一人ぼっちの生活をしているマーニーという女の子がスーッとアンナの前に現われ一人ぼっち同志うちとけ合い、仲良しになります。マーニーはシメッチ屋敷に住んでいます。

入江の潮が満ちてくるころを見計らって二人でボートを漕ぎ出したり、砂丘で追っかけっこをしたりシーラベンダーという水草を積んで花売り娘になったり。

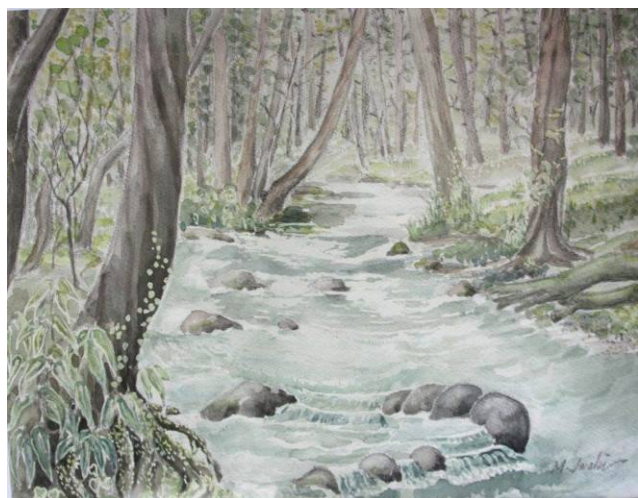
風車小屋はまだアンナにとって未開拓な場所ですが、マーニーはとても怖い場所だと教えてくれます。ある日アンナはそこへ探検を始めます。中は真っ暗で不気味なものでした。恐る恐る階段を上がります。そこでマーニーを見つけるのです。二人とも階段を降りて帰ることが出来ないでいる所へエドワードが現われマーニーだけを連れて風車小屋から出て行きます。アンナはマーニーを許せなく思いますがマーニーがこの地を去る事になり許す気になります。

シメッチ屋敷に新しい5人兄妹のいる一家が越してきます。アンナとも仲良しになりますが、この屋敷の壁裏から見つかったマーニーの書いた日記が思わぬ展開を示します。これから先を述べる事は出来ません。『思い出のマーニー』をご存知ない方はお孫さんのためにも、子供達の今の波に乗るためにも一度ご覧ください。



水彩画

岩城 正大



大暑伊吹山ニ登ル

宮阪 信次

8月某日台風接近の日、伊吹山の高山植物の観察に行く。バスで高速道を走り、駐車場に着くと、周りはガスの霧に包まれていた。高山植物の珍しい花をめでながら、花園を観察し、頂上まで歩いた。頂上につくと、霧が晴れ、視界が広がっていた。夏の暑さも下界とは異なり、涼しいくらいで、百花咲き乱れていた。伊吹山にはこの数年毎年訪れて、自然の偉大さに触れ、元気を充電させてもらって帰る。

たいしょ いぶき きり はる うち
大暑伊吹霧霽中 大暑の伊吹 霧 霽る中

ゆうけい かぜ さわ
幽蹊風爽馥芳叢 幽蹊 風 爽やかにして

ほうそう かんば
芳叢 馥し

よ きた さんちよう ひゃっか み
攀来山頂百花満 攀じ来れば山頂 百花満ち

しょうけい きりよう ころ おの
勝景奇涼心自融 勝景 奇涼 心 自づから

ゆう
融なり

奇涼＝甚だしき涼気

(関西吟詩文化協会 渡辺慧邦先生添削済み)

自然と文化だより

皆様のご協力により22号が発行出来ました。次号もお楽しみに！(広報委員会)